

1973年から5年おきに実施されているNHKの「日本人の意識」調査は、同じ質問によって日本人の価値観を長期にわたって比較可能なかたちで観測してきた、非常に学術的価値の高い調査である。2012年に個票データが公開され、外部の研究者がこの調査データを二次分析することが可能になった。本書は、同データを使った初の本格的な二次分析論文集である。本書の執筆陣は社会学研究者であるが、批評は政治学研究者の視点からのものであることをお断りしておく。

3章から9章は独立した論文であり、生活目標、生活満足感、性役割意識、仕事の価値、政治参加、ナショナリズム、外国イメージという多種多様なテーマが取り上げられている。編者の手による1章が「後期近代と価値変容」という基軸を据え、10章が各章から得られる全体としての結論を的確にまとめていることで、論文集でありながら通読しやすくなっている。

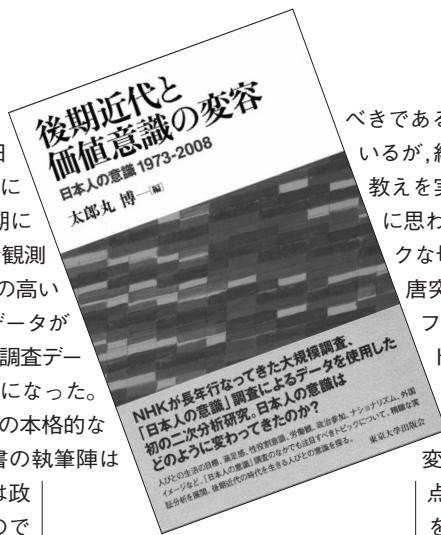
本書の大きな特徴は、全ての分析で年齢・時代・コーホート(age-period-cohort, APC) 効果の識別に力点が置かれていることである。選挙研究を扱う有力誌 *Electoral Studies* の33巻(2014年)で特集号が組まれたように、APC分析は近年の政治学でも注目されている。特に、投票行動の決定要因などの世代間差ないし時代による違いに関して、国内外で盛んに研究が進んでいる。そのようなテーマに関心がある政治学研究者にとって、本書は大いに参考になる。2章で編者がAPC分析をわかりやすく解説しており、APC分析になじみのない読者にも親切な構成になっている。

しかし、APC分析の技術的な面に関していくつか気になった点もある。第一に、編者が2章において、APC分析の方法は理論に基づいて選択される

べきであるというもっともな指摘をしているが、続く各章の分析は必ずしもその教えを實踐しているわけではないように思われた。APCの各変数のアドホックな切り分けによるダミー変数化、唐突な年齢効果の無視(別のライフサイクル変数での代替)、トレンドをもつかなる変数でも代替可能と思われる時代指標の利用、などの問題である。連続変数の切り分けについては、変化点分析(change point analysis)を利用すれば、価値観がどこで変化したのかを恣意性を排除して推定できるかもしれない。第二に、多くの分析で、学歴や職業など、APCよりも後にくると思われる変数が用いられているが、これがAPCの効果から後続変数の効果を取り除くことを意図しているのだとしたら、それらを除いたAPCの効果は何を意味するのか曖昧にならないかという疑問が生じる。また、少なくとも近年の政治学では、回帰分析において後続変数を統制することで独立変数の直接効果を推

定できるという主張は、容易には受け入れられなくなりつつある。

本書はロナルド・イングルハートの理論に大きな影響を受けており、2章を除く全ての章で彼の著作が引用されている。政治学研究者の評者としては、脱物質主義的価値観を測定するオリジナルの質問形式が1983年から採用されている *Japanese Election Study* への言及が一度もなかったことには寂しさを覚えた。とはいえ、これは著者らの責めに帰すべき問題ではなく、政治学研究者がそのようなデータを活かした研究を十分に発信してこなかったことを意味するのだろう。社会学と政治学が協働して日本における価値意識の研究を進展させていくことを期待して、批評の結びとする。



後期近代と 価値意識の変容

日本人の意識 1973-2008

太郎丸 博 編

東京大学出版会
2016年
A5判, 240ページ
3,888円



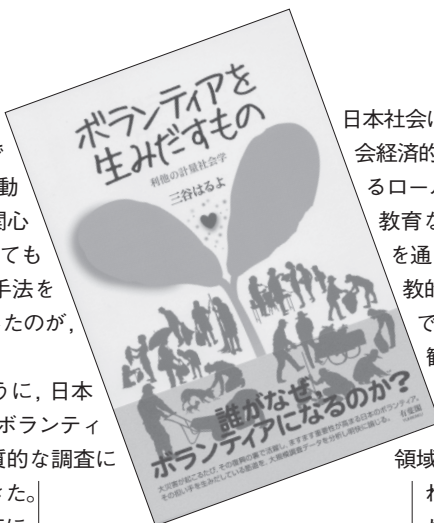
高野和良

九州大学大学院
人間環境学研究院 教授

「ボランティアになる」のは、どのような人々であるのか。単にボランティア活動に参加するということでも、関心をもつというだけでもない、とても直接的なこの問に量的な調査手法を用いて真正面から答えようとしたのが、本書である。

本書でも指摘されているように、日本社会を対象とした社会学的なボランティア研究は、どちらかといえば質的な調査に基づく知見が積み重ねられてきた。そうしたなかで、本書は1995年に実施された「社会階層と社会移動全国調査」(SSM調査)データの2次分析、階層と社会意識研究プロジェクトによって実施された「2010年格差と社会意識についての全国調査(面接)」,「2010年格差と社会意識についての全国調査(郵送)」,さらに、科学研究費補助金による社会調査のデータを用いた計量社会学分析が展開されている。

本書に示された知見は、1990年前後と比較して近年の日本人のボランティア行動が「収入や職業にはほとんど制約を受けておらず、教育水準や主観的性質(共感性・宗教的態度)によって形成」されており、「その主観的性質は幼少期に接したロールモデル(人助けする近所の人・宗教的な母親)から学ばれている」(第8章)というものである。そして、この知見を支えているのは、欧米社会におけるボランティア研究で確認されてきた4つの理論を総合的に組み合わせた「統合理論」である。4つの理論とは、とりわけ日本での社会学的分析で採用される傾向にある、社会経済的な資源の影響を重視する資源理論、心理学でより重視される共感理論、人間に固有の性質としての宗教性を重視する宗教理論、そして、「個人がかつて身を置いた過去の社会環境の影響」に注目する社会化理論である。これらの理論を統合することによって、

ボランティアを
生みだすもの

利他の計量社会学

三谷はるよ 著

有斐閣
2016年
A5判, 220ページ
3,780円

日本社会におけるボランティア行動は「社会経済的資源」とともに、幼少期に接するロールモデルや青年期に受ける高等教育などの「社会化エージェント」を通じて習得された「共感性」や「宗教的態度」によって規定されるのである。社会学で重視される客観要因による説明だけに留まらず、心理学的な主観的要因による説明も加味しながら領域横断的なアプローチから得ら

れた、この「社会化モデル」こそが、「ボランティアになる」ということにほかならない。しかし、このことは人がボランティアになるのはそう簡単ではないことを意味する。実践的な問題との関係からいえば、ボランティア活動、とりわけ福祉的なボランティア活動に対して安易な期待が強まるなかで、幼少期や青年期における環境を考慮することが、次代の「利他」的な行動につながるとの指摘は重要であろう。最後に余計なことを少しだけ。「あとがき」によれば、著者は「利他」のシャワーをあびるような

なかで育ったにもかかわらず「利他」に充ちた人間になったわけではなく、「ボランティア活動に熱心な人たちなど、市井の利他的な人たちの姿にいつも疑問を感じていた」そうである。しかし、本書を読みながら、著者自身も取り組んでいる研究という行為には、実は利他的なボランティア活動としての性格が色濃く現れているのではないかと感じた。そこから、「社会化エージェント」の影響が効果的に、また、どのような方向に働くのかといった条件についても考える必要があるように思った。

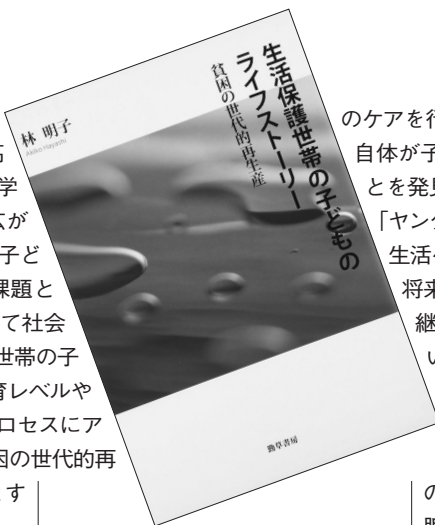
本書をひとつのきっかけとして、量的な調査に基づくボランティア活動研究が、日本社会でさらに広がることを願っている。

今世紀に入り日本の子どもの相対的貧困率の高さが世間の耳目を殊に集め、学習支援などの社会的支援が広がりつつある。また貧困世帯の子どもに対する支援は重要政策課題ともなっている。本書はこうして社会的関心が高まりつつある貧困世帯の子どもをテーマに据え、低い教育レベルや不安定職業にいたる彼らのプロセスにアプローチすることにより、貧困の世代的再生産の仕組みを解明しようとするものである。

このテーマ設定には、著者の2つの問題意識がその背景にある。第1に階層再生産や学力の階層差については多くの学術研究の蓄積があるにも関わらず、それらは親の経済的資本、学歴、職業のみを規定要因とする定量的分析に終始しており、あまりにもシンプルな考察にとどまっている、という認識である。第2に日本社会固有のコンテキストにおいて、貧困の世代的再生産の仕組みが解明されていないことに対する問題関心である。本書では、このよう

な問題認識を出発点とし、貧困世帯における子どもの進路選択のプロセスを追求していくことを分析の中心に据え、研究対象として首都圏近郊地域の生活保護世帯の子どもを設定する。

本書は、低い学力や進路へといたるプロセスを子どもの生活史に即して示す。なかでも学業や学校生活から撤退していくプロセスを家庭生活との関連で説明する図式は注目に値する。貧困世帯の子どもたちは家庭生活に準拠した生活を送らざるをえず、そのことは子どもたちのアイデンティティにもなり、ひいては学業や進学への不利な状況を形成している、という図式である。この点は、近年日本でも広がりつつある「ヤングケアラー」研究を想起させる。「ヤングケアラー」研究は、子どもが家族



生活保護世帯の子どものライフストーリー

貧困の世代的再生産

林 明子 著

勁草書房
2016年
A5判, 244ページ
3,780円

のケアを行っていたこと、また、そのこと自体が子どもの生活を阻害していることを発見し、問題視した。本書の結論も、「ヤングケアラー」研究と同様に、家庭生活への偏重が子どもたちの現在や将来の生活を規定し、貧困の世代間継承の要因となることを示している。この知見は貧困の世代的再生産の解明にとって新しく有益な論点であろう。

一方で、もう一つの著者の研究の出発点にあった日本社会の文脈における考察は成功しているとはいえない。本書の考察は、同じ地域、しかも首都圏近郊で行われた3つの調査の分析に基づくものである。集団参与のパターンなど住民の生活構造は地域によって大きく異なる。また都市以外の地域においては、大学進学にあたり地域移動を伴う比率も高い。本研究の成果は日本社会全体に一般化されたものとは異なり、社会的支援へのアクセスが容易であり、かつ大学進学に対しても有利性をもつ地域に限定されたものではないだろうか。

加えて気になるのは現代の教育達成に関する著者の評価である。高等教育の一般化と経済停滞という時代状況の下、奨学金制度の利用が若年層にとっての新たな困難を生み出している、といった問題などが生じている。教育達成が必ずしもその後の生活保障と連動していない現在、教育達成の意味をあらためて吟味する必要があるように思うが、本書ではその検討がみられない。この点は著者の今後の研究に期待したい。

しかしいずれにしても本書は、貧困再生産研究を新たな地平へと誘っており、多くの読者を惹きつけるであろう意欲的な研究書である。



直野章子

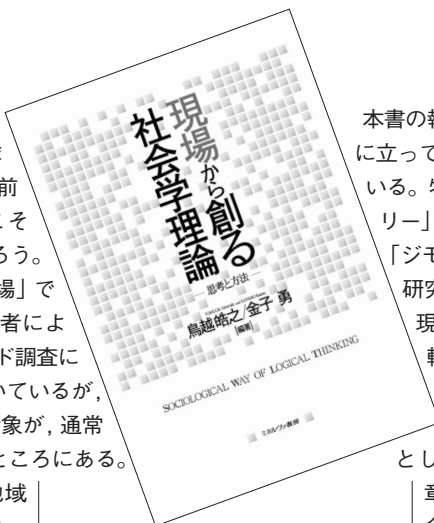
広島市立大学
広島平和研究所 教授

現場にもちこんだ理論的前提が崩れたり、それまで気づかなかった世界が目の前に拓けてきたりする。これこそがフィールド調査の醍醐味だろう。本書はフィールドという「現場」で“格闘”してきた24人の社会学者による論集である。近年、フィールド調査に関する優れた書籍の刊行が続いているが、本書がユニークなのは、調査対象が、通常想定される現場に限られないところにある。

在日が住民の多くを占める地域や「害鳥」と共存する村落といった民族誌的なフィールドだけでなく、大学教育、日記や数量データといった資料、さらには自己までもが「現場」として位置づけられている。それらの多様な現場における驚きや発見、現場を離れてからの問いの深まりや解釈をめぐる迷い、新たな問いの浮上など、フィールド調査を経て社会学の作品へと実を結んでいく過程が多面的に描かれている。フィールドから浮かび上がる意味世界と社会学理論との齟齬に躓きながらも、なんとか踏ん張って二つの「現場」と

対話を重ねてきた研究者たちの、研究対象と学知の双方に対する真摯さが共通してみられる論集である。

研究者の自省性が奨励される方法論的な流れのなかで「現場に寄り添う」のが調査者の倫理的態度であり、現場に根ざした社会学であると語られることがあるが、そうだろうか。たしかに、現場に近づくほどに、既存の学知に対する違和感も大きくなり、石川良子が吐露するように、理論の適用が「研究者の目線で現場の人々を切り刻むことではないように」思えてくることもある(15章)。しかし、現場の人びとに共鳴したり、同一化したりするだけでは「社会」は見えてこないし、社会的貢献もままならない。



現場から創る 社会学理論

思考と方法

鳥越皓之
金子勇 編著

ミネルヴァ書房
2017年
A5判, 258ページ
3,024円

本書の執筆陣の多くは、当事者の視点に立ってその意味世界に迫ろうとしている。特に「同性愛者のライフヒストリー」(16章)、「ひきこもり」(15章)、「ジモト」(8章)を調査対象とした研究が該当するだろう。そして、現場で出会った人びとの痛みを軽減させようと試みたり(4章、5章、6章)、研究を「望ましい社会の探求」へと接続しようとしたりしている(3章、13章、17章)。

しかし、これらの研究が社会的に、そして社会的に優れた成果となりえたのは、現場に巻き込まれながらも、現場から身を引き剥がして研究者としての倫理とポジショナリティを確保しようとしたからである。理論や先行研究という、もう一つの「現場」と格闘することによってである。石川は「存在論的不安」という概念を手掛かりに、当事者自身も気づかなかった「ひきこもり」理解を提示し、阿部真大は、身体性に注目することで、サービス業で働く若者が語る「やりがい」という

言葉とは裏腹の「社会の病理」を可視化した(17章)。新潟水俣病未認定患者の語りを通して被害構造に迫ろうとした関礼子は、地域を鳥瞰的に眼差すことで拓けた方法論的視座から「不可視の被害」の構造を解明するにいたった(5章)。社会学という学知が、現場を凝視するだけでは見えてこない、現場の人びとの生きづらさや苦しみの源を照らし出す光の役割を担ったのである。

既存の理論に依拠するだけでは見落としてしまう「社会」の在り処を、現場が教えてくれることは確かにある。しかし、現場を構成する社会的諸力を理論が映し出してくれることもある。現場が理論を鍛え、理論が現場を動かす。そんな公共社会学の可能性が見えてくるようであった。

排外主義的態度についての計量的な研究の多くは、特定のマイノリティよりも、移民全体に対する排斥感情を測定するというアプローチを好んできた。これは、特定の歴史的文脈（日本では、過去に植民地支配があったため、さまざまな民族的マイノリティのなかで特にコリアンを過小評価する価値意識が強いというようなこと）に囚われずに、「排外主義」という事象の全体像を把握したいという目的によるものである。

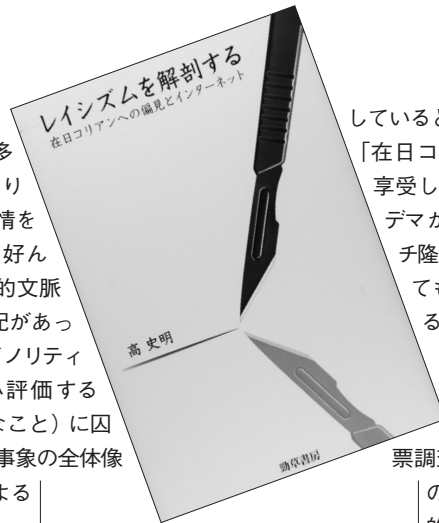
しかし、排外主義には地域的、歴史的な固有性があり、特定のターゲットが集中的な被害に及ぼしやすいという傾向がある以上、そうしたバイアスを無視するかのような研究のあり方は、排外主義の被害を希釈化するようなものだという批判も提起されている。

ローカルな文脈に固有の論点を重視するか、不特定のターゲットを設定することで一般化可能性を求めるかは悩ましい課題だが、高史明『レイシズムを解剖する』（勁草書房、2015年）は、この

難題にひとつの解を導き出した好著である。

高は、移民全体へのレイシズム（同書においては人種・民族的な偏見のこと）ではなく、在日コリアンへのレイシズムに限定して研究を行っているが、そこで発見された特性が、アフリカ系米国人への偏見を対象に構築されてきた「現代的レイシズム理論」ときわめて適合的だという事実を示すことによって、テーマの一般性を証明している。

現代的レイシズム理論とは、「黒人は道徳的および能力的に劣っている」という古典的レイシズムに取って代わるかたちで、「黒人に対する偏見や差別は存在していないにもかかわらず、努力不足に起因する格差を差別だとして過剰に行政に要求し、不当に特権を得ている」という新しいレイシズムが現出



レイシズムを解剖する

在日コリアンへの偏見とインターネット

高史明 著

勁草書房
2015年
四六判, 240ページ
2,484円

しているとする主張群である。90年代に「在日コリアンは日本人にはない特権を享受している」と誣告する“在日特権”デマが登場し、その後のヘイトスピーチ隆盛の素地をつくったことを考えても、この理論の有効性は理解できるところだろう。

高は、このテーマに向き合う上で、(1) ツイッターにおける言説の計量テキスト分析、(2) 調査票調査を用いた統計解析という二つのアプローチを採用している。質的データと量的データを有機的に接合した研究例としても参考になるが、一連の分析を通じて、新旧レイシズムの協同関係を鮮やかに描出しているところが圧巻である。

加えて、日本の心理学分野は、科学的中立性への信仰が強く、リアルな政治性をともなう“生臭い”テーマを研究対象として忌避する傾向があったが、同書は脱色されない“生臭い”ままの問題を扱いながら、なお科学的中立性を実現した研究として、今後の研究に少なくない影響を与えるであろう。

最後にひとつ、同書に課題を指摘するとすれば、よくもわるくもストイックすぎるということだ。高の分析の中には、同書のテーマに収まりきれない発見も少なくない。たとえば、ツイッターの言説分析では日本人のアイデンティティを確認するためにレイシズム言説が動員されているさまが伺えるが、ナショナリズム研究者にとっては示唆に富むデータであろう。にもかかわらず、あくまで新旧レイシズムに議論を限定しようとする姿勢は、学術的な誠意のあらわれだとしても、いささかもったいないとも感じられるものであった。

同書にちりばめられたさまざまな発見を出発点として、さらなる研究の展開が実現することを期待している。